

1907. 4～

ロシア社会民主労働党第五回大会

第12巻 P547 事項訳注

1907年4月30日～5月19日（5月13日～6月1日）に、ロンドンでひらかれた。大会には議決権および評議権をもつ336名の代議員が参加した。そのうち、ボリシェヴィキ——105名、メンシェヴィキ——97名、ブンド派——57名、ポーランド社会民主主義者——44名、ラトヴィア社会民主主義者——29名、と分派に属しないもの——44名であった。ボリシェヴィキはポーランド人とラトヴィア人を味方にして、大会でゆるぎない多数を保持していた。代議員のなかには、レーニン、スターリン、シャウミヤン、ドゥブロヴィンスキー、ヴォロシーロフ、ヤロスラフスキーがいた。

大会はつぎの問題を審議した。（一）中央委員会の報告、（二）国会フラクションの報告とその組織、（三）ブルジョア政党にたいする態度、（四）国会、（五）労働者大会と無党派労働者組織、（六）労働組合と党、（七）パルチザン行動、（八）失業、恐慌、工場閉鎖、（九）組織問題、（一〇）シュトゥットガルトでの国際大会（5月1日、軍国主義）（十一）軍隊内活動、（十二）その他。大会のもっとも重要な問題は、ブルジョア政党にたいする態度についてのレーニンの報告であった。

大会の第27回会議で、ブルジョア政党にたいする態度についてのボリシェヴィキの決議案が審議されたさいに、トロツキーは、決議から、自由主義的＝君主主義的諸政党およびそのうちの主要なもの——カデット党——の社会的基礎の特徴づけを削除するように提案した。レーニンの演説ののち、この提案はしりぞけられた。ブルジョア政党にたいする態度についての決議案への、メンシェヴィキのマルトフとマルティノフとの修正も、大会によってしりぞけられた。

大会は、すべての原則上の問題について、ボリシェヴィキの決議案を採択した。大会では、ボリシェヴィキ5名、メンシェヴィキ4名、ポーランド社会民主主義者2名、ラトヴィア社会民主主義者1名からなる中央委員会が選出された。中央委員候補には、ボリシェヴィキ10名、メンシェヴィキ7名、ポーランド社会民主主義者3名、ラトヴィア社会民主主義者2名がえらばれた。

大会は党の日和見主義——メンシェヴィキ——にたいするボリシェヴィズムの勝利をもって終わった。第五回党大会については、レーニンの論文『ブルジョア政党にたいする態度』（本巻、504～526ページ）およびスターリンの労作『ロシア社会民主労働党ロンドン大会（一代議員の手記）』（スターリン全集、第二巻、邦訳62～95ページ）を参照。

ロシア社会民主労働党第三回（「第二回全国」）協議会

1907年7月21～23日（8月3～5日）にコトカ（フィンランド）でひらかれた。協議会には26名の代議員が出席した。その内訳は、ボリシェヴィキ——9名、メンシェヴィキ——5名、ポーランド社会民主党——5名、ブンド——5名、ラトヴィア社会民主党——2名であった。議題は——第三国会の選挙へ参加する問題、選挙協定の問題、全ロシア労働組合大会の問題であった。第一の議題について、協議会は三つの報告——すなわち、

ボリシェヴィキからレーニン（ボイコットに反対）とア・ボグダーノフ（ボイコットに賛成）の報告、メンシェヴィキとブンドからダンの報告——を聴取した。協議会は多数をもってレーニンの決議案を採択した。全ロシア労働組合大会の問題については四つの決議案が出され、それらは党中央委員会へ資料として提出された。そのうちの一つは、レーニンが提案した決議のテキストにもとづいていた。

ロシア社会民主労働党第四回（「第三回全国」）協議会 第 13 卷 P523 事項訳註

1907 年 11 月 5 ～ 12（18 ～ 25）日にヘルシングフォルスでひらかれた。協議会には 27 名の代議員が出席した。内訳は、ボリシェヴィキ——10、メンシェヴィキ——4、ポーランド社会民主党——5、ブンド派——5、ラトヴィア社会民主党——3であった。

議事日程にのぼった問題はつぎのとおりであった。（一）社会民主党国会議員団の戦術、（二）分派の中央機関、および中央委員会と地方組織との連絡の強化、（三）ブルジョア出版物への社会民主主義者の参加の可否。このほかに、協議会は国会における社会民主党代表団の名称の問題を審議した。

レーニンは、第三国会における社会民主党議員団の戦術の問題について報告した。六月三日政体と党の任務とにたいするレーニンの評価に反対して、メンシェヴィキとブンドは、オクチャブリスト党の政府を支持する必要を固執した。協議会は、ペテルブルグ全市会議の名で提出されたボリシェヴィキ的決議を、多数票で採択した。

協議会はまた、社会民主主義者がブルジョア出版物に参加することを否としたボリシェヴィキ的決議を採択し、国会における社会民主党代表団を「社会民主党議員団」と呼ぶこととした。

メンシェヴィキの中央部が党中央委員会にかくれて地方委員会と連絡をとっていたのを考慮して、協議会は、中央委員会と地方党組織との連絡を強化する措置をさだめた。

「精通者」

第三国会の社会民主党議員団の相談役としてふるまった人々のこと。その大多数は、イエ・スミルノフ、ア・ポトレソフ、エス・ポクロフスキーその他の解党主義者であった。

当時ボリシェヴィキ党の指導的活動家たちは地下にあり、国会議員団の活動に合法的に参加することができなかったが、「精通者」たちは、こういう事情を利用して、国会議員団の活動をメンシェヴィズムの道に向けようと試みた。

1909 年 6 月の『プロレタリー』拡大編集局会議で、レーニンは、国会議員団の活動を援助するために若干のボリシェヴィキを合法面に出すことを提案した。会議は国会議員団協力委員会の設置を決定し、その構成員の一人にレーニンを選出した。

召還派

第 16 卷 P466~467 事項訳注

ストルイピン反動期に、第三国会から社会民主党議員を召還し合法組織内の活動を停止することを要求した一部のポリシェヴィキ（ボグダーノフ、ポクロフスキー、ルナチャルスキー、ブブノフ、その他）のこと。召還主義は、1907 年におけるポリシェヴィキ内部の日和見主義的潮流——ボグダーノフとカーメネフにひきいられる——であるボイコット主義の直接の延長であった。召還派たちは、1908 年に独自のグループを結成し、レーニンに反対する活動を行った。召還派は、国会や労働組合や協同組合その他の合法および半合法組織に参加することを断固として拒否し、非合法組織の枠内にとじこもろうとつとめた。彼らは、革命的な言辞にかくれて解党派の方針を遂行した。彼らは、党から合法的活動形態を利用する可能性をうばい、党を非党員大衆から切りはなし、反動の打撃にさらそうと試みた。レーニンは召還主義者を「新しい型の解党主義者」あるいは「裏がえしのメンシェヴィキ」と呼んだ。

最後通牒派

召還派の一変種で、彼らは、国会議員団にまえもって最後通牒を呈示し、それが遂行されないばあいには社会民主党議員を国会から召還することを提案した。最後通牒派は、実際には隠蔽された偽装した召還派であり、レーニンは彼らを「恥ずかしがり屋の召還派」と呼んだ。

創神派

1905 ~ 1907 年のロシア革命の敗北後にマルクス主義からはなれた一部のインテリゲンツィア党員のあいだに、ストルイピン反動期に発生した文学的および宗教=哲学的思潮。これは、マルクス主義に敵対的な立場をとっていた。創神主義者（ルナチャルスキー、バザーロフ、その他）は、新しい「社会主義的」宗教を創出することを説き、マルクス主義と宗教とを和解させようと試みた。

これらの三派はつながりをもっており、1909 年春には、カプリ島に反党的な学校を組織した。

カプリ学校

ポリシェヴィズムに反対してたたかうために結合した召還派と最後通牒派と創神派の分派的中心で、1909 年に、ア・ボグダーノフ（マクシーモフ）、アレクシンスキー、ルナチャルスキーによって、ゴーリキーの参加もえて、イタリアのカプリ島に設立された。

ロシア社会民主労働党第五回全国（12月）協議会

第 15 卷 P489~490 事項訳注

1908 年 12 月 21~27 日（1909 年 1 月 3~9 日）にパリでひらかれた。協議会には、ペテルブルグ、ウラル、カフカーズ、モスクワおよび中央工業地方の各組織、それにポーランド社会民主党とブンドなどの、最大級の党組織が代表をおくった。協議会には、議決権をもつ 16 名の代議員が出席した。そのうちわけは、ポリシェヴィキ——5、メンシェヴィキ

——3、ポーランド社会民主党—— 5、ブンド—— 3 であった。レーニンは党中央委員会の代表として出席した。

協議会はつぎの諸問題を審議した。(一) ロシア社会民主党中央委員会の報告、ポーランド社会民主党中央委員会の報告、ブンド中央委員会の報告、党のペテルブルグ組織、モスクワおよび中央工業地方、ウラルおよびカフカースの諸組織の報告、(二) 現在の政治情勢と党の任務、(三) 社会民主党国会議員団について、(四) 政治的事情の変化に関連する組織問題、(五) 非ロシア人の諸組織との現地での統一、(六) 在外問題、その他。

レーニンは協議会で、『現情勢と党の任務について』報告を行ったほか、国会議員団について、また組織問題その他について演説した。ボリシェヴィキはこの協議会で、党内の二つの種類の日和見主義にたいして——「党の直接の反対者である解党派にたいして、また党の隠蔽された疾患である召還派にたいして」——闘争を行った。協議会は、レーニンの提案にもとづいて、解党主義を非難し、そして、全党組織にたいして、党を解消しようとする試みと断固とした闘争を行うように呼びかけた。この協議会については、レーニンの論文『大道へ』(本巻、333～341 ページ) を参照。

ロシア社会民主労働党中央委員会総会 (いわゆる「合同」総会) 第 16 巻 事項訳注

1910 年 1 月 2～23 日 (1 月 15 日～2 月 5 日) にパリでひらかれた。この総会は、レーニンの意に反して、ジノーヴィエフ、カーメネフ、リュコフの協力のもとに召集されたものである。総会には、ボリシェヴィキのほかに、あらゆる分派および分派的グループの代表、ならびに非ロシア民族の社会民主主義組織の代表が出席した。レーニンはこれまで、解党主義とたたかうために党維持派メンシェヴィキ (プレハーノフ派) と接近するという計画をたてていたが、レーニンのこの計画とは反対に、調停派は、あらゆる分派を解散してボリシェヴィキと解党派およびトロツキー派とが合同すべきことを要求した。総会では調停主義的分子が優勢を占め、レーニンは少数派となった。レーニンが執拗に要求した結果やっと、総会は解党主義と召還主義を非難する決定を採択したが、他方では、レーニンの意に反して、ボリシェヴィキの機関紙『プロレタリア』の廃刊とボリシェヴィキ中央部の解散についての決定が採択された。レーニンは、ボリシェヴィキ中央部の解消と同時に「ゴーロス」派や「フペリョード」派の分派的中央部もなくすという条件を、総会の決定にふくめさせた。総会は、トロツキーの『プラウダ』(ウィーンの) に財政的援助をあたえるという決定をおこなった。ジノーヴィエフとカーメネフはこれを党中央機関紙にしようとしてつとめた。また、レーニンの抗議にもかかわらず、解党派メンシェヴィキも中央諸機関の構成員に選出された。

この総会における解党派、トロツキー派、調停派にたいするレーニンの闘争については、彼の『政論家の覚え書』(本巻、207～277 ページ) を参照。